

「青葉理振興会」設立の経緯について

花輪 公雄

(第3代理事長, 東北大学・名誉教授)

<目次>

1. はじめに
2. 理学部開講 80 周年記念行事の準備における動き
3. 正式な設立に向けた動きー1995 年ー
4. 正式な設立に向けた動きー1996 年から 1998 年までー
5. おわりに

1. はじめに

青葉理振興会は 1998(平成 10 年)年 5 月 7 日に設立された組織で, 東北大学理学部・理学研究科の諸活動を外部から支援することを目的としている。

2017 年の 10 月 12 日(木)の午後, 私が執務する川内の教育・学生支援センター内にある理事室に, 第 2 代振興会理事長の荻野博先生が見えられ, 次期理事長への就任を要請された。先生は 14 年もの長きにわたり, 理事長職を務められている。東北大学における私の理事(教育・学生支援・教育国際交流)職の任期満了が 2018 年 3 月に迎えること, 同時に東北大学を定年退職することを承知しての依頼であった。私は理事を 6 年間務めている間, 理学部・理学研究科とは意識的に特別なつながりを持たなかったこともあり, 退職後は理学部・理学研究科へ何がしかの貢献をしたいと思っていたので, この要請を快諾した。

さて, 第 3 代理事長として本振興会をどうしようかと考えていたところ, 2018 年は設立以来 20 周年であることに気づいた。そこで, 「青葉理振興会 20 年の歩み」を作成しようと思い立ち, この間の活動を資料などからできるだけ集めることとした。その作業の最中, そもそもこの振興会がどのような経緯で設立されたのかに興味を持つに至った。私自身は, 2004 年度から本振興会の理事を, 2008 年 4 月からは 3 年間理学部長・理学研究科長を務めていたこともあり, 振興会の活動状況は承知していたが, 設立の経緯については何の情報も持っていなかったのである。

2018 年 8 月 8 日(水)の朝, 本振興会の事務を扱っている理学部事務部総務課総務係の加藤卓係長(2018 年 9 月まで, 10 月から総務企画部総務課総務係長へ異動)が, 振興会の文書ファイルと開講 80 周年記念行事関係の複数の文書ファイルを研究室にもってきてくれた。

加藤係長は、当初理学部 80 周年記念事業のファイルの存在は分からないということであったが、再度倉庫を探して見つけてくれたのであった。本稿は、これらのファイルに綴じられた資料から読み取れる振興会設立の経緯について記すことを目的としている。

2. 理学部開講 80 周年記念行事の準備における動き

2. 1. はじめに

青葉理學振興会の設立が初めに議論されたのは、1991 年 9 月 12 日(木)に行われた「理学部開講 80 周年記念事業」の準備の時であった。最初に、理学部事務に保管されている「理学部開講八十周年記念関係綴」のファイルに収められた書類から記述する。

結論を先に述べれば、当時天文学専攻の教授であった竹内峯先生が、長年抱いていた財団設立構想を、自らが委員長となった 80 周年記念行事実行委員会に提案したことで構想が公けになったのである。以下、詳述するように、決定的証拠としてこのファイルの中に綴じられた、竹内先生による財団設立の構想メモ(1991 年 4 月付)を挙げる事ができる。

竹内先生は、1932(昭和 7)年、福島県福島市のご出身で、1955 年 3 月に本学理学部(天文学教室)を卒業し、1964 年 3 月に「脈動性の理論」(原文は仏語)の論文で博士の学位取得している。1966 年に本学理学部助手に採用され、助教授を経て 1988 年 4 月に教授に昇任した。1996 年 3 月に定年退官し、東北大学名誉教授となった。そして、2012 年 2 月 18 日(土)、肺炎のためにお亡くなりになった。享年 79 歳であった。(以上は、福島大学中村泰久先生による、天文月報、2012(平成 24)年 12 月号(788-789 ページ)に掲載された「竹内峯先生逝く」の記事よりまとめた、)

2. 2. 理学部開講 80 周年記念行事

理学部の前身である東北帝国大学理科大学は、本学創立の 4 年後の 1911(明治 44)年に開講した。9 月 11 日(月)に入学宣誓式が行われ、翌 12 日(火)から講義が始まった。本学創立 50 周年記念行事は、1961(昭和 36)年に大学全体で大々的に行われたが、75 周年の記念行事が行われなかったこともあり、理学部独自に、開講 80 周年を祝おうということになったようだ。

開講 80 周年記念行事は、1991(平成 3)年 9 月 12 日(木)の 15 時から、廃業し現在は建物も取り壊された仙台駅前の仙台ホテルで開催された。記念式典・記念講演会、祝賀会には、それぞれ約 150 名、約 300 名が参加している。

記念式典では、櫻井英樹理学部長・理学研究科長(第 24 代、1990 年 4 月～1993 年 3 月、化学専攻)の式辞の後、西澤潤一総長(第 17 代、1990 年 11 月～1996 年 11 月)の祝辞(実際は、細谷純教育学部長による代読)、久城育夫東京大学理学部長と丸山和博京都大学理学部長による祝辞、そして、武田暁名誉教授(第 19・21 代理学部長)と黒田正名誉教授(同窓

会代表、第 23 代理学部長)の祝辞と続いた。続く講演会では、有馬朗人東京大学総長が「大学と基礎科学」と題して、約 40 分間の講演を行った。なお、司会は竹内教授が行っている。

続いて部屋を変えて行われた祝賀会では、櫻井英樹理学部長の挨拶に続き、加藤陸奥雄名誉教授(第 13 代本学総長、第 16 代理学部長)の祝辞があり、乾杯の発声を小貫義男元宮城教育大学長が執られた。式中、何名かから祝辞もあったようだが、その詳細は不明である。

なお、私は 1991 年当時助教授であったが、この 80 周年記念行事を全く思い出せない。なぜだろうと備忘録で調べたところ、その日は、現在北海道大学の低温科学研究所で教授をしている研究室出身の三寺史夫さんが、当時ポスドクをしていたオーストラリアの国立研究所(CSIRO)から一時帰国し、午後に研究室でセミナーを開いてくれた日であった。そして夜は、彼を歓迎するコンパが設けられていた。そのようなことで、私自身は行事の一切に参加していないことが分かった。

2. 3. 記念事業の準備

記念事業の準備を時系列的に追っていこう。準備は、平成 2(1990)年 1 月 21 日付の「世話人 竹内峯」から 11 の各学科委員へ、「理学部開講 80 周年記念行事について」と題する文書の発出から始まった。この文書は、1 月 30 日(水)に会合を開きたいとの開催通知である。

ところで、この文書の日付の平成 2 年は誤りで、当然平成 3 年でなければならず、これは会議の議事録からも確認できる。

当時理学部は、現在と違い 11 の学科から構成されていた。参考のために書き出してみると、数学科、物理学科、同第二、天文及び地球物理学科第一(天文)、同第二(地物)、化学科、同第二、地学科地学第一、同第二、地学科地理学、生物学科の 11 学科である。この文書には、各学科から適任の方を出席させてほしいとある。

さて、最初の文書から世話人として竹内先生の名前が出てきた。これ以前のことを記した文書は何もないので推測するしかないが、おそらく竹内先生が櫻井理学部長に働きかけて、理学部開講 80 周年記念行事を行う方向で既に話がまとまっていたのではなかろうか。

最初の会議は、平成 3(1991)年 1 月 30 日(水)に、理学部長室の向かいにある理学部小会議室で開催された第 1 回会議の議事抄録によると、①9 月 11 日に近い日で記念行事を行うこと、②その中身は今後検討すること、③互選により竹内先生が委員長に選出されたこと、④次回は約 1 か月後に行うことが決められたという。

ここで、実行委員会には 11 の学科から委員を出すことになっていたが、実際には化学科を除く 10 の学科からの 10 人であった。恐らく、櫻井理学部長が化学科所属なので、化学科からは委員を出さないことにしたのだろう。この状態は行事が終わるまで続いている。

次の第 2 回委員会の開催は 3 月 14 日(木)であるが、この回から会は「理学部開講 80 周年記念行事実行委員会」と名乗り、竹内先生は委員長として取り仕切った。4 月 24 日(水)には竹内委員長から委員宛ての文書で式典・講演会・祝賀会の日時や会場の案が提案された。

第3回委員会は4月26日(金)に開催され、その後も委員会は1か月に1度程度開催されたようだ。以下、第4回委員会は5月30日(木)に、第5回委員会は6月6日(木)に開催された。ただし、これらの会の議事抄録はいずれも残されていない。

2. 4. 財団に関する竹内メモ

3月14日(木)開催の第2回委員会の開催通知は3月7日(木)付で出ているのだが、その文書の次に、1991年4月と右肩にあり、文書名が「理学部開講80周年記念行事案(改行)民法法人設立構想メモ(ver.1.0)」,そして「竹内 峯」の名前が記載された文書がファイルされている。文書の1ページ目の右上部には、大きく「資料」とゴム印が押されてある。おそらく、4月26日(金)開催の第3回委員会へ提出された資料と思われる。

この文書はB5版(当時の文書はB5版が一般的)4ページの資料で、竹内先生の財団構想が詳しくまとめられている。内容はI~IVの4章からなる。Iは「財団の規程の概要」と題するもので、19の項目が記載されている。IIは「役員および評議員」で、IIIは「事業の概要」である、最後のIVは「設立」の章で、日程まで記載されている。それによると、1991年6月には代表発起人を確定し、同年末には募金を開始、1993年2月には設立したいとしている。

この構想メモは本振興会にとって重要な歴史的資料であると思うので、その全文を以下に記す。

【財団に関する竹内メモ全文】

日付:1991年4月

表題:理学開講80周年記念行事案 民法法人設立構想メモ (ver.1.0)

署名:竹内 峯

I 財団の規程の概要

- 1 名称 財団法人 ○○会
(例えば、財団法人 自修会記念財団)
- 2 事務所 理学部構内
- 3 目的
 - ・自然科学の基礎的研究の成果の発表、交流に関する諸事業を助成
 - ・研究成果の出版もって自然科学の発展に寄与する
(当面は、財団が主体となって研究調査活動を組織しないとする)
- 4 事業
 - ア 自然科学の進展に寄与する基礎的調査活動
 - イ 国際的学術研究集会開催に対する助成
 - ウ 海外学術研究集会参加に対する助成

- エ 学術研究成果の刊行
- オ その他
- 5 資産
 - ア 設立時の財産(2ないし3億円)
 - イ 資産から生ずる収入
 - ウ 事業に伴う収入
 - エ 寄付金品
 - オ その他
- 6 資産の種別 基本財産(最低5千万円), 運用財産
- 7 資産の管理 理事長が管理する
- 8 基本財産の処分 理事会の承認を経たのち県知事の承認が必要
- 9 経費 運用財産をもって支弁する
- 10 事業計画と収支予算 理事長が編成し, 理事会の議決を経て, 毎年4月1日以前に県知事に届け出る
- 11 収支決算 理事長が作成し, 監事の意見を付け, 理事会の承認を受けて, 6月30日までに県知事に報告する
- 12 役員
 - ア 理事(20名以内か?)
 - うち1名が理事長, 常務理事が3名程度, 代表権は理事長がもつ
 - イ 監事 2名または3名
- 13 役員の選出 理事, 監事は評議員会で選ぶ
理事長, 常務理事は理事の互選
- 14 役員の任期 2年, 再任を妨げない
- 15 評議員 評議員(20名前後か?)
理事会で選出し, 原則として役員を兼ねることはできない
- 16 定足数 理事会, 評議員会とも3分の2以上 文書参加は出席とみなす
- 17 評議員会 理事会が重要事項を決める際にあらかじめ意見を求めなければならない
- 18 規程の変更 県知事の認可が必要
- 19 解散 県知事の認可が必要

II 役員および評議員の構成案

- 1 理事 理学部各教室より 5名程度, 理学部長 1名,
各界有識者 5名以上, 財団事務局長 1名
- 2 評議員 理学部各教室関係者 5名以上, 有識者 10名程度

III 事業の概要

- 1 事業計画
 - ア 国際学術研究集会開催者への助成(年 1件)
 - イ 若手の海外学術研究集会参加への助成(当面 年 3件)

	ウ 研究成果の刊行(その都度検討する)	
	エ 理学部設立時の資料の整理	
	オ その他	
2 収支見積	ア 収入	計 1,600 万円
	(内訳)	
	利子収入	1,500 万円
	寄付金収入	100 万円
	イ 支出	計 1,600 万円
	(内訳)	
	人件費	300 万円
	事務所維持費	20 万円
	その他の事務経費	80 万円
	研究集会助成費	1,000 万円
	若手海外派遣助成	120 万円
	理学部史資料整理	80 万円
3 助成の対象は宮城県内居住者とする		
4 事務局体制	事務局長 1 名(常務理事, 非常勤, 有給, 任期 2 年)	
	事務局員 1 名(常勤, 有給)	

IV 設立

- 1 発起人 各教室より講座数×3 名程度を推薦して頂く 計 200 名程度
- 2 代表発起人 各教室より各1ないし2 名
理学部長経験者 7 名
現理学部長, 評議員 計 3 名
筆頭代表発起人を 1 名決めて頂く
- 3 募金委員会 現職教授 7 ないし 8 名で構成
- 4 総務委員会 設立手続き, 設立募金の免税手続き, 各系より 各 1 名程度で構成
- 5 設立にかかわる経費 印紙代, 印刷費, 郵送料などは, 事務経費として設立募金より支出する。旅費は原則各自負担
- 6 募金
 - ・一般募金(目標 2 億円以上, 同窓生有志および各企業への依頼)
 - ・理学部教官には一定額拠出して頂く
 - ・物理系同窓会は一定額拠金する(数百万円)
- 7 日程

代表発起人確定	1991 年 6 月
募金開始	1991 年末
設立	1993 年月

以上

2. 5. その後の動き

80周年記念事業の準備はその後着々と進んでいく。記念展示の準備、会場の設定、招待者の確定、記念講演の準備などなどであるが、これらについては省略する。以後、財団設立関係に焦点を当てる。

財団設立関係の記載が現れるのは、7月10日(水)付の竹内委員長から、他の9名の委員へあてた連絡文である。3項目ある連絡事項の1つ目は、9月12日開催の行事の開催時間を変更したこと、2つ目は記念展示のこと、そして3つ目の財団設立に向けた動きの報告である。これを以下、全文記載する。

「財団設立については、7月6日の第1回代表発起人会が開かれ、青木健一郎、加藤愛雄、加藤陸奥雄、小西和彦、櫻井英樹、設楽寛、竹内拓司、武田暁、広根徳太郎、森田章、向井利夫の11名の方がご出席になりました。ご案内を差し上げたその他の方々からは、いずれもご欠席の連絡を頂戴しました。この会では、財団設立に向けて準備を進めることとなり、設立準備委員会の代表には櫻井英樹理学部長、同じく事務長には猪狩勉理学部事務長を選びました。猪狩事務長と竹内峯とで、とりあえず県教育委員会に接触することとなりました。」

竹内先生は、実行委員会とは別に、並行して理学部OBの先生方に働きかけて発起人会を立ち上げていた。出席された11名の先生方の中には、山形大学学長を務められた広根先生もおられる。竹内先生の「顔の広さ」には驚くばかりである。

さて、9月12日(木)の記念行事も無事終了する。10月22日(火)の日付で、竹内委員長から委員宛て、10月28日(月)に最後の実行委員会を開催する旨の通知が発出される。残念ながら、この時の議事抄録もないので、話し合われた内容は不明である。

このファイルに綴じられた最後の竹内先生からの文書は、11月27日(水)付のものである。委員長から、理学部80周年記念行事実行委員会委員各位に宛てたもので、その印刷様式から、竹内先生がご自身でワープロ作成した文書であろう。

前文には行事が無事終わったことへの謝意が述べられ、最後のお願いとして、2項目が挙げられている。1つ目は「決算について」であり、収支決算の差額である約200万を、各教室で分担して負担してほしいことのお願である。2つ目は、「理学開講80周年記念事業について」と題するもので、内容は財団設立に関するお願いである。以下、これも全文を記す。

「先日、宮城県教育庁へ伺い、ひととおり事情を説明してきました。税金関係も様子が見えてきましたので、いよいよ財団設立に取掛かりたいと存じます。つきましては、各学科より1名宛て、総務委員および募金委員をお選び頂きたくよろしく願いいたします。期限は、12月13日とさせて頂きたいと存じます。」

この文書の最後は、「実行委員宛ての連絡は公式にはこれが最後で、今後は教授会と学会員を通じて、ことを運ぶように致したいと存じます」と結ばれている。

2. 6. おわりに

この章では、ファイル「理学部開講八十周年記念関係綴」から読み取れる内容を記した。竹内先生が並々ならぬ情熱をもって財団の設立を働きかけていたことが分かる。しかし、それにもかかわらず、次の公式な動きは1995年8月までまたなければならない。この間、何があったのか、残念ながら資料は残されていない。

3. 正式な設立に向けた動き－1995年－

3. 1. はじめに

本振興会に直接関係する事務部が持っている一番古い資料は、1995(平成7)年8月29日(火)付の文書である。すなわち、1991年の理学部開講80周年記念事業での議論からほぼ4年を経て、振興会設立に向けた公式の動きが開始された。

この文書は、「青葉理学振興会(仮称)の設立について」と題するもので、設立準備会の筆頭代表発起人で、当時理学部長・理学研究科長であった田中正之先生(第25代、地球物理学専攻)から、各教室の同窓会代表者に宛てられたものであった。

以下、この文書と5つの添付文書の概要を紹介する。

3. 2. 発出文書の内容

発出文書の趣旨は、各同窓会から設立にあたっての発起人を推薦してほしいというものである。数学系から80名というように各同窓会に数字の割り当てがなされていた。総計490名の発起人を募っている。

この文書には、5つの添付書類があった。1 青葉理学振興会(仮称)設立に関する経過説明書、2 同設立資金募金趣意書、3 同設立資金計画書、4 同事業計画書、5 同年間収支予算計画書である。以下、簡単に内容を紹介する。

1の「青葉理学振興会(仮称)設立に関する経過報告書」である。はじめに、1991(平成3)年7月に、「財団法人青葉理学振興会(仮称)」の設立に向けて代表発起人が協議したことが書かれている。しかし、大学院重点化などの諸般の事情により遅れたこと、財団法人となるための準備金約3億円の目途が立たないこと、しかしながら、急ぐ必要があるため、1996(平成8)年4月に任意団体として本会を設立したいことが述べられている。文書の末尾には、田中正之先生のお名前が記されている。

2の「青葉理学振興会(仮称)設立資金募金趣意書」では、1994・95(平成6・7)年度には本部署が大学院重点化されたことを受け、「このような時に、理学研究の振興、理学的思考を行える人材の育成が急務であり、そのためにも各種の国際的研究集会への支援、有意の若手研究者への援助、更に東北大学理学部の歴史と伝統を後世に残すために努力などの事業

の意義はとりわけ大きいものがあります」としている。

そして、「以上のような理由から、東北大学理学部の開講 80 周年を記念する行事として、東北大学理学部の同窓生有志が相諮り、財団法人青葉理学振興会(仮称)を設立しようとしてまいりましたが、取敢えず任意団体として発足することとした」としている。さらに、「この会は、基礎科学・技術の振興の基となる理学の発展と、その将来の発展を担う人材の成長を支援するための諸事業を行い、もって社会に貢献することを目的」とするとある。

この文書の日付は同じく1995(平成7)年8月29日であり、青葉理学振興会(仮称)設立準備会筆頭代表発起人・東北大学大学院理学研究科長・田中正之、さらに代表発起人として14名のお名前が記されている。以下お名前を挙げよう。伊東椒*、加藤睦奥雄*、北村信、黒田正*、小西和彦*、櫻井英樹*、設楽寛、鈴木次郎*、砂川一郎、武田暁*、向井利夫、森田章*、荻野博*、小田忠雄の各先生方である。なお、お名前の後ろに*を付した先生方は、理学部長・理学研究科長をお努めになられた先生方である(荻野先生はこの年度以後に就任)。

この趣意書の末尾には、1 青葉理学振興会(仮称)設立発起人名簿、2 同設立資金計画書、3 事業計画書が添付されることになっている。1 の名簿は当然のことながら、この段階では付されていない。2・3 は先の3・4 の添付資料に対応する。

次に3の「青葉理学振興会(仮称)設立資金計画書」には、設立時の寄付の目標額が示されている。個人からは一口5,000円で5,000口、2,500万円、法人からは一口5万円で500口、2,500万円、合計5,000万円を見込んでいた。これらはすべて会基金への繰り入れとなる。

次に、4の「青葉理学振興会(仮称)事業計画書」である。事業は「理学振興のための事業」と、「受託事業」の二つの分かれている。

○理学振興のための事業

- 1 理学研究のための若手研究者の海外派遣(研究会参加等)への援助事業
- 2 理学分野での国際会議開催への援助事業
- 3 理学研究の伝統の発掘、歴史の解明(東北大学百年史理学部編の編纂のための資料収集等)のための事業
- 4 その他、理学振興に資する事業

○受託事業

- 1 理学部同窓会及び理学部各教室同窓会の業務の一部受託(理学部同窓会名簿の発行業務を含む。)事業
- 2 その他、本会設立の趣旨に沿う内容のもので、会の本来の業務に差し支えの生じない事業

最後に、5の「青葉理学振興会年間収支予算計画書」には、事業が軌道に乗った時の毎年の収入・支出見込みが書かれている。収入の部は、寄付金収入(200万円)、同窓会事務委託量(100万円)、同窓会名簿発行委託料(500万円、委託された場合)、会基金よりの繰入金

(470万円), 雑収入(50万円), 合計1,320万円. 一方, 支出の部は, 若手研究者の海外派遣援助(100万円), 国際会議開催への援助(400万円), 理学部史に関わる資料収集整理経費(120万円), 同窓会名簿編集印刷経費(500万円, 委託された場合), 事務局経費(150万円), 雑支出(50万円), 計1320万円.

4. 正式な設立に向けた動き－1996年から1998年まで－

4. 1. 設立発起人の委嘱(1996年3月4日(月))

先に述べたように, 1995年8月29日(木)発出の文書は各教室同窓会に対し, 設立発起人の推薦を依頼するものであった. これに対し, 各同窓会から回答があったと思われるが, それらの書類は残っていない. 次の文書は, 青葉理学会設立筆頭代表発起人 理学部長・理学研究科長 田中正之・他14名の名前で, 各位に対して「青葉理学会設立発起人の委嘱について(依頼)」とする文書である. 1996年3月4日(月)付で発出された. この文書の別紙として, 1995年8月29日(木)付の文書の別添資料と同じ設立趣意書, 事業計画書, 設立資金計画書が添付された.

送付対象人数は546名である. 内訳は, 学内者が158名, 学外者が388名である. 系別では, 数学系が17名, 物理系が227名, 化学系が172名, 地学系が52名, 生物系が78名であった. この文書には諾否を意思表示する返信用のハガキが同封され, 4月5日(金)まで知らせてほしいこと, 返事がない場合には承諾したとみなすことなどが書かれている.

送付文書の末尾に次の記載があったので紹介する. 「昨年(1995(平成7)年のこと)秋には理学部同窓会の改組が行われ, 会長に加藤陸奥雄元東北大学長が推挙され, 来年の理学部設立90周年にあたって理学部同窓会の名簿発行の企画も検討中と伺っております」なる文章である. 確かに, 翌年(1997(平成9)年)8月に, A4版の899ページに及ぶ分厚い「東北大学理学部同窓会名簿」が刊行された. この名簿の「まえがき」は, 同窓会副会長の森田章先生(名誉教授, 第18代理学長, 物理学専攻)によって記された. 会長の加藤陸奥雄先生が同年3月8日(金)に急逝されたのであった.

4. 2. 主要なメンバーによる打ち合わせ(1996年4月4日(木))

その後1996年4月4日付の「青葉理学会設立発起人会関係」と題するメモが残っている. 欄外に学部長, 竹内, 伊藤, 事務長, 村上の名前が鉛筆で記されている. 学部長は4月から荻野博教授(第26代, 化学専攻)が就任している. 3番目の「伊藤」は, 化学専攻の伊藤翼教授(化学専攻, 現名誉教授), 最後の「村上」は庶務掛長である. この文書には, 後日発送されることになる募金趣意書確定の前に決めておくべきこととして, 1. 規程の整備, 2. 発起人会会計規則, 3. 役職等, 4. 口座開設について議論されたことが記されている.

4. 3. 総務委員会の開催(1996年4月30日(火)／5月10日(金))

前項の4月4日会合で総務委員会を立ち上げるため、委員を推薦することが決められたようだ。実際、4月15日(月)付文書で、伊藤教授から庶務掛長へ委員名の届け出があった。推薦された委員は、高木泉教授(数学系)、吉村太彦教授・小松原武美教授・土佐誠教授(物理系)、三上直彦教授・伊藤翼教授(化学系)、大沼晃助教授(地学系)、大橋広好教授(生物系)であった。総務委員会は5月10日(金)の16時から、理学部中会議室(事務棟1階の警務員室向かい)で開催された。設立発起人会の運営要項と同会計規則の検討が議題であったが、議事録が残っていない。

なお、総務委員会はその後開催されたという書類は残っていない。5月10日開催が最初で最後の会合ではなかったろうか。

4. 4. 募金趣意書の印刷と送付(1996年12月～1997年1月)

5月の総務委員会の開催から12月まで、動きが分かる文書は残されていないが、設立発起人会の印鑑の作成の起案書などは残っている。この間、募金趣意書、理学部紹介のパンフレットの準備などがなされていたものと思われる。1996年12月8日(日)付の趣意書印刷に関する起案書がファイルされている。欄外には、当日、学部長、竹内名誉教授、協議済みとの鉛筆書きのメモがある。しかしながら、12月8日は日曜日であり、この文書の日付については疑問が残る。

募金趣意書、郵便振替用紙、パンフレット「理学部はこう変わりました」の送付に関する1997(平成9)年1月24日付の起案書がファイルされている。募金趣意書は「東北大学理学部同窓会会員 各位」宛で、「青葉理学振興会設立のための募金について(ご依頼)」のタイトルが付されている。日付は「1997年1月」である。差出人は「青葉理学振興会設立発起人会」であり、「筆頭代表発起人 荻野博」・他15名で、あて先は同窓会世話人となっている。代表発起人の15名の名前が記されているが、内13名は1996年8月29日付の文書と同じであるが、当時理学研究科評議員であった小田忠雄教授(現名誉教授、数学専攻)と吉村太彦教授(現名誉教授、物理学専攻)のお名前も追記されている。

募金趣意書は、1万2000部印刷されたが、各同窓会経由で個人に送付された。ファイルされている1996年12月25日(水)付のメモには、竹内名誉教授からの連絡として、数学系1,200部、物理系3,400部、化学系3,200部、地学系1,600部、生物系1,100部、計10,500部であるので、12,000部印刷する、とあった。

4. 5. 募金についての中間報告(1997年10月吉日)

同年8月末までに、1,264名の方から、合計1084万1053円の寄付金があったことの中間報告が、荻野筆頭代表発起人からなされた。この文書の別紙として、8月末時点での収支状況、設立発起人会役員名簿が添付された。

4. 6. 竹内名誉教授から荻野学部長宛ての私信(1998年1月11日(日)付)

1998年1月上旬, 竹内名誉教授から, 直接会って打ち合わせたいが海外出張することもあり, 手紙で考えを知らせたいとの私信が荻野理学部長に届いた. 設立のための会合に日程のこと, 会則のこと理事長などの役員人事の案などが記されている.

4. 7. 主要メンバーによる設立の打ち合わせ(1998年2月25日(水))

荻野理学部長から, 竹内名誉教授, 吉村教授, 佐藤(繁)教授の3者宛に, 2月25日に打ち合わせたい旨の通知がなされた(1月27日付). 同時に, 会則の案も送付されている. 2月25日会合の議事録は残っていない. なお, 吉村教授と佐藤教授は1997年度の理学研究科評議員である.

4. 8. 代表発起人の打ち合わせ会(1998年5月7日(木))ー振興会の設立ー

荻野理学部長から14名の代表発起人に対して, 5月7日15時30分から理学部中会議室で打ち合わせ会を開催するので出席してほしい旨の通知が4月に行われた. 代表発起人の一人であった鈴木次郎先生(東北大学名誉教授, 第17代理学部長, 地球物理学専攻)は前年7月にご逝去されており, 代表発起人からは外れている.

この打ち合わせ会で何が議論されたのかは, 議題が書かれておらず, さらに議事録も残っていないので不明であるが, その後の活動から判断すると, 理事長・理事・監事の人事が承認されたこと, 会則が認められたことが挙げられよう. 実際, 5月12日(火)付の荻野理学部長から総務委員会委員への通知には, 選出された役員名が記されている. さらに, 会則の承認の日付はこの日となっている.

同じく5月12日の日付で, 6月3日(火)の15時から, 総務委員会を開催する旨の通知も発出された. 議題は, 上記打ち合わせ会の報告であった.

4. 9. 第1回理事会と第2回理事会(1998年6月・8月)

5月26日(火)に, 「青葉理学振興会理事長 武田暁」名で, 6月16日(火), 15時から, 理学部中会議室で理事会を開催する通知が理事宛に発出された. 2時間を予定する会議で, 1. 諸報告, 2. 本会の事業内容についての意見交換, 3. 今後の本会の事業の進め方について, 4. その他が議題である.

6月16日(火)に第1回理事会が開催されたが, 詳細に記載された議事録が残されている. それによると, 12名の役員のうち10名が出席した. 出席者全員の自己紹介の後, 本会の事業活動の内容, 年間予算の概略等に自由討論を行っている. 以下, 概略を示す.

年間経費は, 集まった1,000万円のうち300万円を基本財産とし, 残り700万円を概ね3年間で消化すること, その後再度募金すること. 事業は, ほかの財源ではできないような特徴のあるものにしたいこと, 特に優れた学生の顕彰, 中でも女子学生への顕彰を柱の一つにしたいことなどの意見が出た. 今後の事業計画の策定の段取りについては, 武田理事長, 荻野

理事、竹内理事、事務局長の4名に一任した。その後、事業計画案の作成は、8月4日(火)に武田理事長、荻野・竹内両理事、鈴木事務局長が集まり、事業の案を作成した。

1998年8月31日(月)に開催された第2回理事会には、武田理事長以下9名の理事が出席した。ここで現在まで続く学生の顕彰事業(3賞)が承認された。青葉理学会奨励賞、青葉理学会賞、黒田チカ賞。選考は理事・監事の中から選考委員会を作って選考することも決まった。また、サセックス大学に留学する学生への渡航費援助を行うことも承認された。この他、3賞の広報・周知などについて意見交換がなされたが、詳細は武田理事長、荻野・竹内両理事、鈴木事務局長の4人で検討実施することとした。

5. おわりに

5. 1. おわりに

本稿では、振興会設立の議論が公式に表面化した1991年の理学部開講80周年記念事業の準備の中の議論から、正式に設立に向けて動き出した1995年、そして正式に設立された1998年の動きを、理学部事務部に残っている文書に基づいて記した。

改めて感ずるのは、歴代理学部長をはじめとする多くの方々の協力を得て、かつ時間のかかる様々なプロセスを経て、振興会の設立が実現したことである。既述の通り、この間、この動きを主導したのが竹内峯先生であった。1991年に財団法人の構想を公にしてから7年目に、任意団体としてはあったが、振興会の設立を迎えた。竹内先生の喜びは一入ではなかったらうか。

なお、振興会の会則の作りが極めて厳密で任意団体にしては大ききであること、会計も複式簿記であることなど、組織の大ききや活動内容にしては仰々しいように思える。これも設立の経緯から理解できる。すなわち、当初は法律で縛られる財団の設立を目指していたからである。現在は現状に合わせて運用しているので何の問題はないが、会則や会計はこのような歴史的背景があったことを反映してのことである。

5. 2. 竹内先生と私

最後に竹内先生と私の関係について述べておきたい。竹内先生の所属した天文学専攻と、私が所属した地球物理学専攻の教室系講座は、青葉山移転後は物理A棟(現在の物理系研究棟、H26)に研究室を構えた。天文学専攻は最上階の8階に、地球物理学専攻は、7階と6階である。そのようなことから竹内先生は頻繁ではないものの、日常的に建物内外でお会いする機会があった。いつも‘優雅’に、‘おっとり’と歩いている先生の姿が思い出される。

また、1980年代は、助手や助教授でも運営委員に選出されれば、理学部教授会・運営会議に出席できた。私は、助手・助教授時代、何度か運営委員に選ばれているので、教授会や各種委員会でも先生とご一緒しているはずであるが、特段の記憶はない。

先生とお話する機会が増えたのは、先生の定年退職以降のことで、私が理学研究科の執行部の一員となった2000年代半ばのことである。2004年に鈴木厚人理学部長・理学研究科長(第28代、ニュートリノ科学研究センター)の下で、教育担当の副研究科長に就任したが、この年に振興会の理事にも就任している。当時竹内先生は青葉理学振興会の常務理事を務められていた。2005(平成17)年11月には先生から青葉理学振興会報告のコラムの執筆を頼まれている。この事情を、私のウェブサイトで公開しているエッセイ、「折に触れて」No.7の「300字コラムの原稿執筆の顛末記」(2006年1月15日掲載)で取り上げた。興味を持たれた方はご覧いただきたい。文中に出てくるTM先生とは、竹内峯先生のことである。なお、このエッセイには、6編の300字コラムの原稿を先生に手渡しているが、どの原稿が採用されるか不明であると記した。実際に2006(平成18)年2月発行の第5号に印刷されたのは、「ほんのちよつとのお節介」であった。

その後の数年間は、振興会報告の編集の手伝いも行った。また、2008(平成20)年4月から3年間、私は理学部長・理学研究科長(第30代)を拝命したが、在任中に振興会の寄付事業を行ったり、3賞の副賞を賞金から楯に変更したりと、先生とご一緒に振興会の活動の一端も担わせていただいた。

また、2012(平成24)年からは振興会報告の編集委員長になること、そしてあとで知ったのだが、竹内先生に代わり常務理事に私が就任することを、先生自身は予定されていたようだ。しかし、私は本学の執行部に入ることが決まったため、双方の人事とも実現しなかった。代わりに就任されたのは、数学専攻の高木泉教授である(現本学名誉教授、教養教育院・総長特命教授)。

先生は、本学の川内けやき保育園の開設(2005(平成17)年度)に尽力されるなど、退職後も本学の職場環境の整備に向けて活動を行ってきた。ご自身の専門分野である天文学の教育や研究に加え、組織全体がよりよく発展するための環境改善にも常に注力されていたのである。そのような観点から考えると、理学部・理学研究科の発展のために青葉理学振興会の設立を古くから発想したことは極めて自然なことであろう。

第3代理事長を引き受けたわけだが、今回、このような調べをしたことで、今まで以上に振興会の重みを感じるようになった。理事長の責任は重大である。

竹内峯先生の本学や理学部・理学研究科に対する生前のご貢献に感謝の意を表して、本稿の筆を置くこととする。

(2018年10月29日記)